

病院経営が難しい時代に、健全な経営を続ける藤沢町民病院 その秘けつは、町民と病院の強い信頼関係



国保藤沢町民病院 佐藤元美院長

岩手県南に位置する人口九千五百人の藤沢町。平成五年七月に開設した藤沢町民病院は、病院経営が難しい時代に黒字経営を続ける町民自慢の病院だ。

開設当初、診療の待ち時間などに苦情が相次いだ同病院。「健全な病院運営に住民参加は不可欠」と話す佐藤元美院長は、町民に医療や病院の情報を公開しながら、意見や要望を聞く「地域ナイトスクール」を七年度に始めた。佐藤院長を始め、保健・医療・福祉のスタッフが各地域を回り、町民とひざを交えて語り合う。町民からの要望を受けて、午後の診療や土曜の診療を実施するなど、住民の視点で医療を見つめ直し医療者の視点に偏りがちな運営やサービスを改善した。その結果、病院と地域の温度差もなくなり、病院に対する苦情は減った。さらに二十年からは、研修医の研修報告会を町民にも公開。「若い医師を俺が育

PROFILE 佐藤元美（さとう・もとみ）
昭和30年一関市千厩町生まれ。54年自治医大医学部卒、県立宮古病院勤務。60年県立久慈病院内科医長。平成4年藤沢町福祉医療センター所長。5年国保藤沢町民病院院長。17年国保藤沢町民病院事業管理者



国保藤沢町民病院

平成5年開設。常勤医師5人、非常勤医師3人、一般病床数54床の町立病院。診療科目は内科、外科、整形外科、小児科。専門外来として健康増進外来、禁煙外来がある。18年には全国自治体優良病院として最高賞の総務大臣賞を受賞



以前は院内のスタッフだけで行っていた研修医の研修報告会を町民にも公開。毎回多くの町民が参加し、盛り上がっている。



保健・医療・福祉のスタッフが地域に向いて町民と情報を共有する「地域ナイトスクール」。和やかな雰囲気の中で行われる。

先進地域から学ぶ

地域医療再生のキーワードは、医療への住民参加。
2つの先進事例から、そのヒントを探る。

病院を何として支えたい 一致団結した住民が、地域の医療を守る

「健康なうちはいいけれど、病院を頻りに利用するようになった時になって、病院がなくなっていたら大変なこと。自分たちでできることを考え、行動したかった」と結成の理由を語る菊池美和さん。今年二月、市内の育児サークルや母子保健推進員などの有志百六十人が集まり「県立釜石病院サポーターズ」を結成した。

釜石病院は、十九年四月に釜石市民病院と統合し、市民病院と分け合っていた救急車搬入数が倍増。一方で常勤医の数は変わっておらず、医師の負担が激増していた。医師から直接話を聞いて地域医療の現状に理解を深めたいと、四月二十四日、会員十七人が病院に向いて勉強会を開催した。直前に手術を終えたばかりにもかかわらず、遠藤秀彦釜石病院長が出席し、全国的な医療の問題や同病院



PROFILE 菊池美和（きくち・みわ）
昭和46年仙台市生まれ。結婚を機に釜石市に移住。育児サークル「てんしっちのおさんぽ」、ダウン症児の親の会「てんしのわ」代表も務める。

の現状を分かりやすく説明してくれた。

忙しく働く医師の状況を病院で見てはいたものの、昼食さえゆっくりに取れず、夜も当直勤務をこなす勤務の実情を知り「こんなに働いていたとは」と参加者の多くが驚いた。会員それぞれが、所属するサークルの活動で勉強会の様子を報告し、当日参加できなかった人へも理解を広げた。

今後も勉強会を開催して、地域が抱える医療の問題の解決策を病院とともに探る予定だ。また、地域の行事に医師を招いての交流会や、病院の清掃などのボランティア活動も企画し「医師や病院のためにできること」を模索している。

美和さんは「二人一人の活動が広がり、釜石病院だけでなく地域全体の医療を守る取り組みに発展していければ」と明日を見つめる。

県立釜石病院サポーターズ 菊池美和代表



4月24日には1回目の勉強会を開催。病院の実情を説明する遠藤院長の話に、17人のメンバーは真剣に耳を傾けた。



2月9日メンバー10人で県立釜石病院を訪れ、美和さんが遠藤院長に決意書を手渡した。この日からサポーターズの活動がスタート。